

ヤングオフィシャルキャンプ2008 参加レポート

遠光 悠祐

日 程：平成20年8月15日（金）～17日（日）

会 場：埼玉県立スポーツ研修センター
埼玉県立上尾運動公園体育館

講 師：Thomas Jasevicius 氏（特別講師）・永田 睦子氏（特別講師）
橋本 信雄氏・関口 知之氏・宮武 庸介氏
岩田 千奈美氏・須黒 祥子氏・吉田 正治氏・山崎 人志氏
安西 郷史氏・高橋 伸次氏・清水 幹治氏・藤垣 庸二氏
佐藤 誠氏・中嶽 希美子氏・佐々木 潤氏・平野 彰夫氏・
野村 孝一氏・

総 務：後藤 弘志氏・小林 剛樹氏・栗原 俊之氏

広 報：貫井 義昭氏・和泉 淳一氏

受講者：全国の若手日本公認審判員48名

受講班：受講生および講師は1～4班に分けられ、私は4班に属していた。
4班担当講師は岩田 千奈美 氏、高橋 伸次 氏、関口 知之 氏であった。

日 程：

【8月15日（金）】

12：00～13：00	受講者受付
13：00～13：15	開講式
13：20～14：15	〈講義Ⅰ〉 講師：永田 睦子 氏
14：15～14：30	更衣、移動
15：00～17：15	〈実技Ⅰ〉
17：15～17：30	移動
17：45～18：00	研修センターの利用説明
18：00～19：00	部屋に移動・入浴・夕食
19：00～19：10	部長挨拶
19：10～20：10	〈講義Ⅱ〉 講師：平野 彰夫 氏
20：10～20：30	〈講義Ⅲ〉 講師：佐々木 潤 氏

20 : 30～20 : 45	Thomas 氏からの講評
20 : 45～21 : 30	入浴
21 : 30～22 : 00	班別ミーティング
22 : 00～22 : 30	就寝準備
23 : 00～ 6 : 30	消灯

【8月16日（土）】

6 : 30～ 7 : 00	起床・洗面・部屋の掃除等
7 : 00～ 8 : 00	朝食・出発準備
8 : 00～ 9 : 00	移動・実技準備
9 : 00～17 : 00	〈実技Ⅱ〉
17 : 00～18 : 40	移動・入浴・夕食
18 : 40～19 : 45	〈講義Ⅳ〉 講師：Thomas Jasevicius 氏
19 : 50～20 : 35	〈講義Ⅴ〉 講師：宮武 庸介 氏
20 : 35～20 : 50	閉講式
22 : 00～22 : 30	就寝準備
23 : 00～ 6 : 30	消灯

【8月17日（日）】

6 : 30～ 7 : 00	起床・洗面・片付け（各自荷物整理）
7 : 00～ 8 : 00	朝食・出発準備・部屋点検
8 : 00～ 9 : 00	移動・実技準備
9 : 00～14 : 30	〈実技Ⅲ〉

（各自帰りの交通機関に合わせて随時解散）

8月16日(土)

講義 I 講師：永田 睦子 氏 (元 全日本代表・元 シャンソン化粧品)

内容：選手時代の経験

① 高校時代

- ・ 全国大会に出場していたが良くてベスト 8。1 回戦負けが常であった。
- ・ 3 年のとき、臨時コーチに「ウィンターカップ優勝するぞ」と言われ、選手は無理だと思っていたが、臨時コーチは選手に「優勝する」と言わせようとし、次第に選手が言うようになった。
- ・ 『全国制覇』を口に出すことで、または横断幕を見ることですごく考えるようになった。
 - ・ 何をすればよいか、考えながら練習するようになった。
 - ・ 目標に向かってひとつひとつやっていくことで変わっていった。
- ・ 優勝はできなかったが準優勝で高校時代のバスケットを終えた。

② シャンソン化粧品・全日本での出来事

- ・ 入団当時はわからないことが多かった。
- ・ 練習では同じポジションの先輩を見ながら練習した。
- ・ シャンソンでも全日本でも最初から試合に出られたわけではない。少しずつ試合に出られるようになった。
- ・ 試合に出る為、アップ時によく走り、声を出すことでアピールした。
- ・ ベンチにいるときは同じポジションの人のプレイや相手チームのプレイを見て、対応できるように準備していた。
- ・ 審判に対しても対応できるように自分でラインを決めていた。
- ・ 良いプレイ・悪いプレイを毎日書き出し、寝る前にもう一度目を通して明日の目標を決めていた。
- ・ 5 対 5 の練習はケンカみたいなラフプレイが多かった。(普段は仲良し)
 - レギュラー争いが激しい。試合は審判がいるのである意味楽。
- ・ 紅白戦では相手チームを想定してナンバーコールも本番同様に行う。
- ・ 心技体…まずは気持ちを作ることが大事である。
 - ・ 先輩に勝とうと思っていない新人は試合に出られない。
 - ・ 自分がやれると思わないとできるようにならない。

③ 試合に向けて

- ・ イメージトレーニング
 - (例) 試合会場やシュートのこと、試合当日の流れなど
- ・ 試合前の過ごし方の工夫
- ・ 試合の入り方

④ 総括（選手時代の経験から必要だと感じたこと）

- ・ 目標を立てる。
- ・ 口に出す（紙に書く）。
- ・ 何が必要か考える。
- ・ 体を使う（練習する）。
- ・ 普段から戦うこと。

実技 I 10分×2ピリオドの高校生モデルゲーム

1～3班は上尾運動公園体育館、4班はスポーツ研修センターで実技を行った。

<担当試合：男子>

対戦：川越南－浦和北 A

主任：高橋 伸次 氏

主審：遠光 悠祐（京都） 副審：若林 哲 氏（埼玉）

講評：①笛の吹き方、シグナルの仕方が同じである。

- ・質の悪いファウルについてはより強く吹くべきである。
- ・バスケットカウントは力強く行くと良い。

②トレイルオフィシャルの位置取りが高い。

- ・スペースウォッチングをする為に、もっとペネトレイトして捉えるべきである。例えば飛び込んでくるプレイやリバウンド。

③リードオフィシャルで何の為に右に動くのか。

- ・ローポストの1対1をリードオフィシャルが捉えるとは限らない
- ・ドライブに対してリードオフィシャルは縦視野で捉える。
- ・ゴールに向かってきたショットを捉えるのが遅い。

講義 II 講師：平野 彰夫 氏

内容：ルールについて

① トラヴェリングについて

今年度の全国審判長会議で、しっかり見極めるよう通達した。しかし県によっては、厳しく取り上げるようにという勘違いが発生している。

② ファウルについて（シリンダーの概念に照らし合わせて）

審判長会議でも使用された DVD を用いてケースに応じて解説された。

- ・ リーガルガーディングポジションとは、相手チームのプレイヤーに向かい合い、両足を普通に広げて床につけたときのこと。
- ・ 相手に近づくことでシリンダーがなくなる。

- ・ 相手に平行または後方に動いているときはシリンダーが保たれる。
- ・ 背を向けたディフェンスが起す触れ合いはイリーガル。

講義Ⅲ 講師：佐々木 潤 氏

内容：英会話について

- ① 国際審判員になるために
 - ・ 日本には 16 名の FIBA レフリーがいる。
 - ・ 審判技術とともに英語力を養って欲しい。
 - ・ 若いうちから英語を使えるようになって欲しい。
 - ・ FIBA レフリーを見据えるうえで英語は必要。
 - ・ 上級レフリーになることは終わりではなく始まり。
 - ・ 目標は何か明確にする。
- ② 国際試合では
 - ・ 1 試合で複数の国の人たちと関わることになる。
 - ・ 国際試合は英語が共通語。ちなみに第二公用語はフランス語。
 - ・ 以前、オリンピックで共通語がないのが原因でトラブルが起きた。
 - ・ 英語は笛やシューズと同じようにひとつの道具である。
 - ・ 日本のレフリーはアジア NO.1 であり、世界のトップクラス。
→判定力もあるが、コミュニケーション能力が高い。
 - ・ 自分で居場所を作らなければならない。
 - ・ 3 人の審判がチームとして協力することが大事。
 - ・ 北京オリンピックは 30 名の FIBA レフリーが参加する。
- ③ 英語を身につけるために
 - ・ 普段からの意識が必要。
 - ・ 英語の接点を増やす。
→語学学校、映画、英字新聞、FIBA のサイトなど。

班別ミーティング

内容：自己紹介・班長決め・ルール学習課題

- ※ 規則委員長の平野 彰夫 氏から次項のような課題が各班に配布された。
最終日にこのケースの考え方について解説があった。

【ルール課題】

- (A) チーム A, チーム B ともに、チーム・ファウルが 3 回ずつ。
(B) チーム A のチーム・ファウルは 5 回、チーム B のチーム・ファウルは 3 回。
(C) チーム A のチーム・ファウルは 3 回、チーム B のチーム・ファウルは 5 回。
(D) チーム A, チーム B ともに、チーム・ファウルが 5 回ずつ。

A4 がショットしたボールが空中にある間に、リバウンド・プレイについて、それぞれまったく別の場所で、主審が A5 の B5 に対するパーソナル・ファウルを宣する笛を鳴らし、副審が B6 の A6 に対するパーソナル・ファウルを宣する笛を鳴らした。

ファウルの笛が鳴ったのち、

- ① A4 のショットのボールがバスケットに入った。
- ② A4 のショットのボールがバスケットに入らなかった。

それぞれ、

- (A)→①の場合、(A)→②の場合、(B)→①の場合、(B)→②の場合
(C)→①の場合、(C)→②の場合、(D)→①の場合、(D)→②の場合
についてどのように考え、どのように処置するか？

【このケースの考え方】

- 班によってこれはダブルファウルの処置をすべきと考えていた班もあったが、競技規則第 35 条 35.1 より、このケースはダブルファウルではない。
- 文章では同時に起こったファウルなのかどうか分からないように表現されているが、2 人の審判で話し合い、ファウルが起こった順番を決め、その上で特別な処置を行う。
- 特別な処置をした結果、ショットが不成功でスロー・インにて試合を再開するときは、先にファウルが起こった場所に最も近いところからスロー・イン

8月17日(土)

実技Ⅱ 10分×2ピリオドの高校生モデルゲーム

全班が上尾運動公園体育館で行った。

<担当試合：女子>

対戦：竜ヶ崎第二一騎場

主任：高橋 伸次 氏

主審：遠光 悠祐 (京都) 副審：中平 春香 氏 (香川)

講評：①まだ笛の吹き方が同じである。

- ・質の悪いファウルに対してもっと気持ちをこめて吹くべきである。
- ・プレイヤーにそのファウルがダメだということが伝わらない。

②トレイルオフィシャルでの位置取りが遅い。

- ・プレイが行われるところを捉えているのではなく、そのプレイの後半、もしくは終わりかけを捉えているようなタイミングである。
- ・次のプレイに対して遅れが生じてくる。

③相手審判との視野の分担。

- ・縦視野と横視野の使い分け。
- ・近くても見えないところ、遠くでも見えるところがある。

講義Ⅳ 講師：Thomas Jasevicius 氏

内容：審判をするうえで

① 良いレフリーになるためには

- 走ることでよいポジションを占め、スペースを捉えて判定する。
- ルールブックにないシグナルをしない。
 - ・何もないのなら何もしない。
 - ・いわゆるノーファウルのO.Kサインによって不信感を招く。
- **アイコンタクト、コミュニケーション。**
 - ・審判は最小のチームである。
 - ・プレゲームカンファレンスを大事にする。
 - ・ポストゲームカンファレンスも大事にする。
 - ・試合中にお互いの存在を確かめ合う。
- 体調管理、ルール理解、メカニクスの理解。
- ゲームを感じる事が大事である。
 - ・チームが負けているとき、ディフェンスを変えることがある。
 - そのときに流れが変わるところを感じ取って欲しい。

② 審判をしていて感じる事

- 誰の為に審判をするのか。
 - ・最終的には自分の為である。
 - ・1試合1試合を一生懸命吹くことが自分の成長につながる
 - ・手を抜いて審判をするのは選手に大変失礼である。
- 1つの試合で同じ場面はない。
- 良い笛が吹けたとしても、ずっと続くわけではない。
- 謙虚にならなければ集中して良い笛が吹けなくなる。
- 身だしなみをしっかりして欲しい。
 - ・パートナーと会うときの第一印象が大切である。
 - ・飛行機のパーツと一緒に大事なことである。
- YOC の経験を地元を持って帰って活かして欲しい。

講義V 講師：宮武 庸介 氏

内容：国際審判員の姿（数多くの国際大会に参加して）

① 例年の夏の審判活動

- WJBL サマーキャンプ、インターハイ、トップリーグ研修、キリンカップ、ミニ国と続けて活動している。
- 2006年はこれに加えて、7月にはトルコ開催のヨーロッパU-20選手権、8月には日本開催の世界選手権が加わった為、職場である小学校の1学期終業式に出られず、2学期始業式にも出られなかった。しかし通知表はトルコ出発前に管理職に提出、トルコ滞在中には暑中見舞いを書いていた。
- 家で寝たのは4日間しかなかった。

② 国際大会での出来事

- 公認17年目の年、香港クリニックでFIBAレフリーの受験をした。
 - ・滞在先では自分でコミュニケーションを取って過ごした。
 - ・クリニックの講義では常に一番前。
 - ・同じ受験生同士で友情が生まれた。
 - ・協力してもらった地元の人に感謝。
- 初めて国際試合は、静岡ABCシドニーオリンピック予選
 - ・このとき初めて乱闘を経験した。
 - ・冷静に対応し、処置も間違えずに試合を運営した。
 - ・インストラクターから試合の最初に整理するよう指摘された。
 - ・担当した国の国民性や習慣を知らなさ過ぎると言われた。
- 2001年ヤングメン世界選手権、2002年世界選手権を経験した。
- 国際大会の宿舎のジムでトレーニングをしている人がいた。

③ 大事なこと

- 家庭・仕事（基盤になるところ）
- 社会人としてのマナー
- バスケットに対する思い
- 割り当てが命
- バスケットを楽しむ

8月18日（日）

実技Ⅲ 10分×2ピリオドの高校生モデルゲーム

全班が上尾運動公園体育館で行った。

今回は、3日間の実技で受講生全員が2試合担当するよう割り当てられていた。

3日間を終えての感想

この3日間を通じて、より良い判定をするためには何が必要なのかということとを改めて痛感しました。プレイをしっかり捉えて判定できるポジションを占めるためには、予測をしながらプレイに応じて足を動かしてその現場のスペースを見に行くことがいかに重要かということ、そして質の悪いプレイに対しては強い笛、力強いシグナルで表現し、それをプレイヤーに伝えなければならないということを感じました。合わせてバスケットの技術の理解もこれから勉強していかなければなりません。

また、全国の審判とも交流を深めることができ仲間を増やすことができました。常にモチベーションを高く保って審判に取り組み、プレイヤーのために審判をしているのだという考えを持ち、そして将来は上級審判に絶対なるのだという強い気持ちがひしひしと伝わってきました。私もこれまでやってきたことが無駄にならないように日々研鑽を積んでいきたいと思えます。

最後になりましたが、ヤングオフィシャルキャンプ2008でお世話になりました日本協会の方々、そしてこのような機会を与えてくださった京都協会審判部の皆様に深くお礼申し上げます。今後ともご指導ご鞭撻のほど宜しくお願い申し上げます。